

「異年齢クラスの保育」

藤戸純子
(東月寒保育園)

○ 高橋美恵子
(共栄学園短期大学)

<目的>

東月寒保育園では、6年前より、クラス編成を「学年ごとの年齢別」から、「3歳・4歳・5歳児の混合クラス」としてきました。クラスの形態と内容の変化に伴う子どもたちの人間関係やあそびを探り、今後の異年齢クラスのありかたを考えたいと思います。

<方法>

- 各年齢の子どもを3つに分けて、3～5歳児が所属するクラスをつくる。
- 毎年クラスのメンバーを変えることはせず、1人の子が、3年間同じクラスで過ごすようにする
- 人とのつながりを大切にすることから、保育士も出来るだけ変えないようにする。

以上のようなことを踏まえて実施してきました。

- クラスは、生活とあそびを共にする場とし、課題によっては「年齢別」に行うこともある。

幼児クラスの概要

	はらぺこ	おひさま	そらいろ
3歳	7	8	6
4歳	10	9	9
5歳	8	7	9
保育士	2	2	2
計	25	24	24

<結果>

1. 「新入児を迎える」

3月末にクラス内で、進級をします。あたらしく3歳児になる子どもたちも、迎えます。まだ卒園していない5歳児が面倒をよく見てくれ、幼児クラスでの生活の仕方をていねいに教えてくれます。3～4日で持ち物の場所や席、午睡の支度などがわかるようになります。旧年長児のやり方を新しい年長児は、よく見て、自分たちもやろうとします。1ヶ月も経った頃には少しずつ慣れて、3歳児はなんでも手を出し、あちこち出しっぱなしにして、かたづけが出来なくなってしまう場面が見られます。そんな時、5歳児は代わりにかたづけたりもしますし、叱ったりすることもあります。とくに、あそびのじゃまをした時には、ちゃんと説明をしていくようにします。

新入児、進級児が落ち着いてくると、5歳児の活動もじつくりと出来るようになります。毎年、母の日のプレゼントに「ふきん」を縫いますが、これは5歳児の活動になります。そんな時、同室の3歳や4歳の子どもたちは、他のあそびをしながらも気にしています。

4歳のNちゃんは、いつも5歳の子と遊んでいます。5歳だけの活動が、納得できません。「Nちゃんだってできる」と言い張ります。あまり続くのでNちゃんにも渡してみました。うれしそうにやり始めたNちゃんでしたが、ハサミで手を傷つけてしまい、「Nはこまさん(年長)になってからにする」と言い、それからは、無理に割り込んだりすることは、なくなりました。

2. ①「あそびのじゃまをするBくん」

2歳から進級してきたなかに、コミュニケーション障害のBくんがいます。新し環境に落ち着かず、部屋中を跳びまわり、おもちゃをばらまき、飾ってある花を食べたりします。

5歳児が中心になって、積み木で高い塔を作っていると、Bくんが走ってきて、壊してしまったのです。唖然として見ていた子どもたち…。Bくんは、全く悪いことをしたとはわからず、にこにことして、また壊しに行きます。壊されることが続き、ダメと言っても効果がないので子どもたちはあきらめ顔で、しだいに積み木あそびをしなくなってしまいました。

保育士は、Bくんにあったあそびを模索し、乳児クラスから、おもちゃを借りて、テーブルの上において一緒に遊んだり、積み木を積んで見せたりしました。

そんなことを繰り返すうちに、Bくんは、自分からイスにすわり、テーブルのおもちゃであそぶようになりました。そんなある日、5歳児のOちゃんが「Bくん、おいで」とテーブルで呼んでいます。テーブルの上には、おもちゃが用意されています。Oちゃんは、Bくんをテーブルのあそびに誘い、他の子たちは積み木で遊ぼうという知恵だったのです。積み木ばかりでなく、ビーズなど作って飾ってあるものを次々と壊されたので、Oちゃんは考えたようです。その後もBくんはじゃまをすることもありましたが、夏の終わりころには、ほとんどなくなりました。

②「Bくんと仲良くなりたいSくん」

Sくんが、「ベエー、ベエー、ベエー」とBくんの

「声」を真似していることに気付いた保育士は、ドキッとして見ると、Sくんは、かくれるようにしながら真似ています。Bくんは、うれしそうにSくんにじゃれています。2,3週間すると、Sくんは真似をしなくなり登園してくるBを迎えにいたり、一緒に遊ぶ姿が見られるようになりました。

Sくんは、Bくんと仲良くなりたくて、真似をしていたのです。Bくんのやっていることを真似することをおしてBくんの世界に入って行こうとしていたのです。

3・行事の見なおし

異年齢のクラスになってから、運動会の競技について見なおしをしました。なかでもクラス対抗リレーについては、論議になりました。クラス全員の対抗リレーをしていたのですが、3歳児は、リレーの意味がわからず、バトンを渡されてもどうしたらいいのかわからず、立ったままの子がいたりもしました。3歳児はチームでの勝敗というルールなど無理もあるということから4、5歳児で、リレーをすることにしました。

障害を持った子もいるなかで、どういう競技にしていっていいのか今後も検討が必要となっています。

4・ともだちとの関係の変化、深まり

ごっこあそびなど、一緒にあそぶ機会が多くなってくると、年齢別の時とはちがう姿がみられます。通常は5歳児が中心になって、あそびがすすんでいきますが、ごく近くで共通の体験をしているので、さまざまなあそびが見られます。

①4歳児中心になると

Mちゃん(4歳児)がお医者さんになって、お医者さんごっこを始めました。いつもは、5歳児がお医者さんのことが多いのに、この日は、5歳児の二人が看護婦さんになっています。そのため、看護婦さんのリードで、Mちゃんは診察をしています。5歳児のしっかき者の看護婦さんは薬をわたしたり、「お大事に」と声をかけています。

②5歳児にくっついていく3歳児

5歳の女の子が中心になって、レストランごっこが始まりました。ウエイトレス、コックさんと厨房のなかは、皆5歳児です。他の子はお客さんなのですが、5歳によく遊んでもらっていたHちゃんだけは、厨房に入り込んで、皿洗いなどをしています。役を忘れてちがうことをすると、叱られながらも仲間として受け入れてもらっているようです。かたづけの時間にな

って「閉店」し、かたづけを手伝おうとしたお客さんを帰したあともHちゃんは「ほら、これ、洗って!」「ちよろちよろしないで」などと言われながら、仲間としてあつかわれています。

そんなふうにしたHちゃんも4歳児なり、新しい子どもたちには、だれよりもやさしい子になっています。

③3歳児に混じってカルタをする5歳児

3歳児向けの絵だけのカルタに、「私もいれて」と、5歳児のNちゃんがやってきました。3歳が相手なら勝てると思ったのでしょうか。結果は3歳児のAちゃんが圧勝でした。Nちゃんは、その後、読み手になり遊んでいました。

<考察>

1・子どもたちが、3年間同じクラスで過ごす」意味は、自分の年齢の2学年上と下の年齢の子たちと1～2年ともに過ごし、つながりが、深まることです。それも3歳の、いちばんちいさい年令で世話をしてもらうことから、はじまり、3年間一緒に過ごすなかで、他の子どものことをよく知って、助けたり、下の年令の子だもたちに、伝えていこうとしていることは、注目できます。

2・子どもたちの人間関係は、同学年の子どもたちだけでなく、一緒に過ごす異年齢の子どもたち(障害をもった子たちも含んで)と親しんで、相手のことをわかろうとし、信頼関係がつけられています。1クラスのなかの同学年の子ども数は減りますが、そのことは、1人1人の子どもを際立て、自身をもっていく要素にもなっています。

3・保育士の役割は大きい。

クラスの雰囲気や環境構成など、一年間単位の年齢別のクラスのときよりも、保育士の影響力は大きく、責任は求められるが、仕事の内容は、ひとりひとりの子どもたちとの結びつきは、より深まり、援助しやすくなっていると考えられます。

<今後に向けて>

異年齢のクラスは、とくに定員枠廃止などともからんで、今後さらに多くなっていくと思われます。1人1人の子どもが日々、気持ちよく暮らせる保育園、保育室という観点から、さらに、実践を積んでいこうと思います。